



雲晴

春彼岸号

「雲晴」第十八号

平成二十八年三月一日発行

貞林院 瑞正寺

〒125 東京都葛飾区東金町五丁目四六―五
 電話(〇三三) 三六二七―三四一五
 FAX(〇三三) 五六九九―五九一五

おしえの花束

朝は「おはよう」の

挨拶から



あなたは今朝起きて、ご家族と「おはよう」と挨拶しましたか。いやそれを毎朝やっていいますか。

漢和辞典で調べてみますと、挨拶の「挨拶」という字は「開く」という意味で、「挨拶」は「交わる」というような意味があります。つまり挨拶することによって、まず自分の心を開き、同時に相手の開かれた心との交わりによって、お互いに心を通わせ合い、理解し合うのですね。どんな話し合いも、心が閉ざされていたのでは決してうまくいきません。

人間関係はすべて、挨拶に始まり挨拶に終わります。たとえば、よそのお宅を訪問したとき、まず挨拶、そして用件に移ります。それが終わって帰るときも、挨拶をして帰りますね。いう

ならば挨拶は心の交わりのためのかけ橋であり、潤滑油だといってよいでしょう。

世の中や家庭内がガサツになり、ギスギスしている最大の原因は、挨拶がおろそかにされているからだと思います。心の触れ合いを大切に考えるならば、まず家族同士「おはよう」の挨拶からスタートしたいものです。

家庭内での挨拶は「おはよう」に始まって、食事のときの「いただきます」「ごちそうさま」「出かけるときの「行ってきます」「行ってらっしゃい」、帰ったときの「ただいま」「お帰りなさい」、そして夜休む前の「おやすみなさい」、この八つしかありません。この八つがすべてできなくとも、せめて五つや六つはぜひ毎日実行したいものです。

非行少年や犯罪者の出た家庭を調べてみておしなべていえることは、日常生活のなかで挨拶が全く実行されていないという事実です。つまり触れ合いのない、暗い家庭だというわけです。そこで家庭でも職場でも、気軽にまず「おはよう」の挨拶を交わし合う、ごく簡単な基本的マナーを習慣づけようではありませんか。これは教育とかけつけとかいう以前の問題でもあります。

二月十五日に入滅されたお釈迦さまの涅槃会を迎え、いつも以上にお釈迦さまをお近くに感じる中で、私は次のお諭しを思い出しました。

ある時、盲目の阿那律尊者が破れ

● 限界を知る ●

回向院副住職 本多将敬

てしまった自分の衣を裁縫しようとした時、思うように針に糸を通すことができず、「誰か親切の功德を積まないか」と回りの人に助けを呼びかけました。

が仏教者の姿ですよ。」と優しくおっしゃられました。

最近私も忙しい、もうできないなど、勝手に自分の限界を作ってしまったことが多くなり、「もういいか」と

途中で諦めてしまうことがあります。「限界」という文字を辞書でひくと「これ以上できないという境目」とあります。体力の限界など「〇〇の」を頭に付けて使われることが多い言葉ですが、仮に「体力の」限界を感じても、バクトルを変えて「慈しみの」や「優しさの」など頭の言葉を換え用い続ければ、いつまでも自身の可能性の限界、幸福の限界を拡げることができるのではないかと、何だかお釈迦さまより勇気付けられた気がしました。

民話の小箱 (岩手県)

サケの大助 ● 九死に一生



気仙郡竹駒村(けせんぐんたけこまむら)の相川という家に残るむかし話である。

この家の先祖は、織田信長(おだのぶなが)との戦に負けて、はるばると奥州(おうしゅう)へ落ちのびてそこに住まっていた。ある日多くの牛を牧場に放していると、不意に大きなワシが来て仔牛をさらって飛び去った。主人は大いにおこって、

どうしてもあのワシを捕まえずにはならぬと言って弓矢をとり、牛の皮をかぶり、牧場にうずくまってワシの来るのを五六日の間待っていた。そのうちにつかれてとろとろとねむると、やにわにワシが飛び下りて来て、主人をむんずと引さげたまま、はるか彼方へと運んでいった。主人はなすすべがないので体をちぢめ息を殺して、ワシのする通りに

なっていると、遠くの海の方へ行く。そしてある島のおおきな松の木の巢の中へ投げ込んだまま、またどこにもなく飛び去った。

主人はワシの巢の中にいて、はてどうかして助かりたいものだと思つて、あたりを見わたすと、巢の中に鳥の羽がたくさん摘まれてあった。そこでそれを集め、縄をなつて松の木の枝に結びつけてやつと地上へ下りたが、それからはどうすることもできぬから、その木の根元に腰をかけて、思案にくれていた。

そこへどこから来たのか一人の白髪のおじいさんがあらわれて、お前はどこからここへ来たのか、なんの

一口法話



我が子の死が善知識

平安時代の女流歌人和泉式部が最愛の子を亡くし、悲しみのあまり、「子は死して たどりゆくらん 死出の旅 道しれずとて 帰りこよかし」と歌いました。人間の死後の世界は真つ暗やみの中を一人でトボトボ歩いて行くと聞いているけれど、もし途中で道に迷ったら、そのまま自分の所へ帰って来てほしいと歌ったのです。

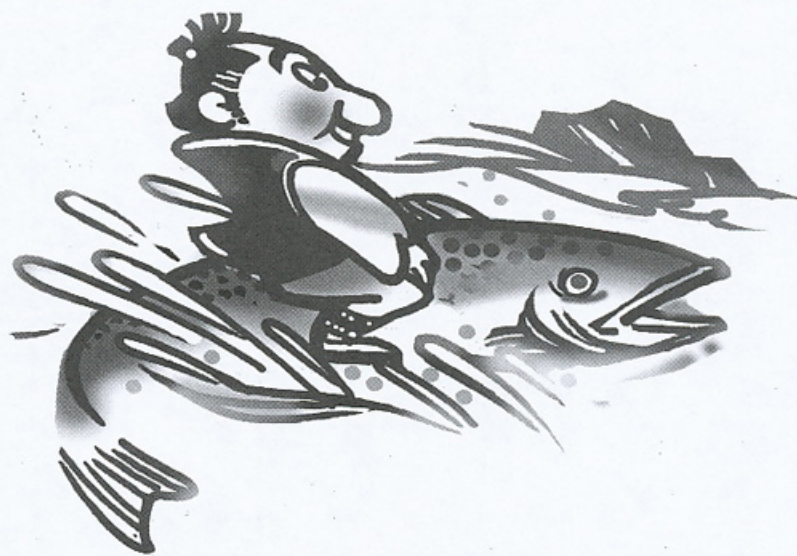
また「もろともに 苔の下には 朽ちずして うづもれぬ名を 見るぞ悲しき」とも歌っています。子供がお墓に埋葬された時、なぜ自分も一緒に埋葬してくれなかったのか。お前はなぜ私ひとりを残して死んだのかと亡くなった我が子を恨んでいたのです。

しかし、和泉式部もやがて、佛のみ教えに出会い、心境が変わり、「仮にきて 親にはかなき 世を知

ためにこられたか、難船（なんせん）にでもあったのならともかく、こんな所へよいに來られるものではない。ここは玄界灘（げんかいなだ）の中の離れ島であるといった。

主人は今までのことを物語ってどうにかしてふるさとへ帰りたいが、玄界灘と聞くからにはすでにその望みもたえてしまった。となげくと、おじいさんは、おまえがそんなにふるさとへ帰りたいなら、おれのせなかにのれ。そうしたら、必ず帰国させてやろうと言った。

主人はげんに思って、それではお前様はだれで、またどこへ行かれるかと聞くと、おれは実はサケの大助である。年々十月二十日にはお前



のふるさと、今泉川（いまいずみがわ）の上流の角枯淵（つのがんぶち）へ行つてはたまごを生むものであるとのことであった。そこでおそれるおそれるおじいさんのせなかに乗ると、しばらくして自分のふるさと今泉川に帰っていた。

こういうわけで、今でも毎年の十月二十日には礼をあつくしてこの羽繩（はなわ）（気仙三十三観音の一つで、羽繩観音堂のことと思われる）に、おみき、おくもつをそなえて今泉川のサケ漁場へおくり、吉例によつてサケをつかまえるために川をせき止めるしかけを数間（一間約一・八メートル）開けることにするというのである。 おしまい

れと教えて帰る「子は菩薩なり」と詠みました。仮に私を母親としてこの世に生まれてきて、亡くなった我が子から「お母さん、いつまでも死んだ私を当てにして、なげき悲しむのは愚かなことです。佛のみ教えを頼りとして生きるのですよ」と教えられたのです。

総本山知恩院布教師会ホームページより

ひとり残され恨んでいた我が子を今度は菩薩として合掌して拜むようになり、まさに和泉式部にとつて亡くなった我が子が善知識だったので。悲しい体験を通して、親子の縁を仏縁とし、見事に昇華させたのです。私どもも、ご縁のある方の死から学ばせて頂き、お念仏に励んでまいりましょう。

いのちの書



「生老病死」 故林 錦洞書

貞林院瑞正寺 住職 林 清方

金文で書かれたこの作品は「生老病死」と読みます。シャープな線と躍動感のある書体が独特な味わいを感じさせます。

お釈迦さまが悟りを開いた時、人は生まれながらにして四つの苦しみを背負っていることを説かれました。この世に生まれて来たことが苦しみの始まりであり、そして誰でもがいずれは老いて病気になる、最後は死を迎える。これらが四苦であります。

さらに四つの苦しみ、愛する人

と別れる苦しみ「愛別離苦」、憎い人とも会わなくてはならない苦しみ「怨憎会苦」、欲しい物を得ることができない苦しみ「求不得苦」、心や体を形成するものを自分ではどうにもできない苦しみの「五蘊盛苦」を加えて八苦となります。よく四苦八苦の苦勞をしますと使われるこの言葉はここから出ている訳です。

お釈迦さまは人間として生まれて以上、この逃れることのできない苦しみから如何にして救われる

かを仏の教えとして後世に残されました。これらの苦しみは老若男女、貧富の差も社会的地位も問わず誰にでも一様に襲いかかってきます。だからこそあらゆる苦しみから逃げることなく、立ち向かっていく勇気が大事です。

死をも正しく見つめられる人生こそが、生きる勇気を与えてくれるのではないのでしょうか。生と死は背中合わせ、対立するものではありません。

春の彼岸法要ご案内

春の彼岸法要は次のとおり行いますので、お参りください。

三月二十日(日) 正午より

彼岸法要は中日の正午に先祖代々のご回向をいたします。塔婆をご希望の方は、電話・ファックス・メール等にて寺までお申し込みください。

塔婆料 三千元
回向料 志納

「書道教室が始まりました」

昨年にご案内しました寺での書道教室がいよいよ始まりました。

第一回を昨年十一月十日に開講し、その後原則として毎月第二火曜日に行われています。現在、檀信徒を中心に約十五名の方々にご参加頂いており、ほとんどの方は初心者ですが、和気あいあいと楽しい雰囲気皆さんお稽古されています。

講師は今田篤洞先生と助手として外山錦紅先生にご指導頂いております。

両講師とも先代林錦洞に師事しており、長年に渡り先代が主宰していた菽

水書人社を支えて下さった方々です。

今田先生は現在、産経国際書会の副理事長として各方面でご指導に当たられご活躍しております。

随時入門は可能ですので、ご希望の方は寺までお申し込み下さい。

「貞林院瑞正寺・書道教室」

毎月第二火曜日 午後三時より

場所 貞林院瑞正寺 客殿

月謝 毎月三千元

*書道用具は各自でご持参下さい。



「墨の匂いが部屋に拡がります」

寺からのお願ひ

○本堂の入口は防犯上、常時鍵を掛けておりますので、御用の方はブザーを押して下さい。なお屋外にトイレはありませんので、遠慮なくブザーでお知らせ下さい。

○墓参りの際は、最初に必ず本堂正面にてご本尊様に手を合わせお参りし、それから墓参りするよう心掛けましょう。

○お墓へのお供え(食べ物・お酒・飲料水等)はお参りが済みましたら必ず持ち帰るか、その場で召し上がる

ようにお願いします。カラスなどの餌になり、お墓を汚す事にもなりますのでご協力をお願いします。



施餓鬼法要のご案内

本年の施餓鬼法要は五月十四日(土)に厳修いたしますのでご予約下さい。

ご案内につきましては、あらためて四月に発送いたします。

◇これも仏教用語なの?◇

「有頂天(うちょうてん)」

物事が全て順調だったたりするとつい有頂天になってしまうがちですが、この有頂天という言葉は仏教用語で「数ある天の中でも最高の天」を意味します。仏教の世界観では地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天という六つの迷いの世界(六道)があり、全ての生き物はその世界で生まれては死ぬことを繰り返している(輪廻)とされます。なかでも天は一番上位ですが、有頂天はその中でも最も高い境界ですので六道の真の頂点と言えます。つまり最高の処に到達した絶頂の喜びが有頂天となる訳です。

(参考資料:浄土宗新聞「くらしの中の仏教語より」)

(貞林院瑞正寺)